

ほっと通信



梅雨の季節になりました。運動会や体育祭も終わり、学級に活気が出たり、学級としてまとまってきた頃でしょうか。

特集： 子どもの成長過程から学ぶ

成長した子どものこれまでを振り返ることで、特別支援教育に関する指導・支援のポイントを学ぶことができると思います。本号では、アスペルガー症候群と診断されている青年を支えてこられた方々のお話を紹介しながら、子どもへの指導・支援のポイントを考えてみたいと思います。

アスペルガー症候群と診断された青年 A 君の場合

- 発達を支えた人たちからの聞き取り -



< A 君はいま高校4年生 >

アスペルガー症候群であると診断されたのは、小学5年生の時でした。当時、アスペルガー症候群という障害を知っている先生は、まだあまりいませんでした。

市内の小・中学校を卒業した A 君は、自分のペースで、かつ少人数のきめ細かい指導が受けられるチャレンジスクールと呼ばれる公立高校に毎日通っています。入学時、高校を4年かけて卒業するコースを選択しました。小・中学校では「気持ちが落ち着かなくなったら別室で気持ちを落ち着けてきてよいという支援」を受けました。このような継続的な支援および通級指導などのおかげで、今では別室で過ごさずとも気持ちを落ち着けられるようになってきたそうです。そして A 君は、いま高校最終学年を迎え、就労を見すえた進路を考えています。

< 中学校の担任の先生から >

教科担任制での特別支援教育の工夫が学びたくて、当時の担任の先生2名から話をうかがいました。「保護者からの依頼があって、それに応えたいということはあったけれど、特別なことは何もしてないです」と前置きし、以下について話してくれました。

入学前、保護者が学校に A 君の障害、特性を伝えにきたこと。

A 君の障害特性、対応について職員会議で共通理解を図ったこと。

イライラしたときは、トイレや保健室に行くことを許すという対応をとったこと。そして、そのことについて A 君自身とも約束しておいたこと。また、それに対するからかいがないように、学級・学年で指導を行ったこと。

< 保護者から >

中学校以外のことも知りたくなり、保護者から話をうかがうことにしました。

【幼児期】 **育てにくさ** 赤ちゃんの時は、かんが強く、よく泣きました。幼児になると、公園に遊びに行く途中、「今日は用事があるから別の道順で行くよ」と言っても、A 君はいつもの道順ではないことに対して泣きわめきました。このようなことが日に何回もあり、下の子もいたた

め大変でした。また「お母さんの背中には目があるんだからね」と言うと、A君はお母さんの背中を触って目を一生懸命に探すというように、ことばを文字通りに受け取ってしまいます。ことばの理解のこのような難しさから、コミュニケーションの難しさがありました。しかし健診、幼稚園の入園検査、小学校の就学時健診で指摘を受けることは一度もありませんでした。

【小学校】 **トラブルが増えてきた** 低学年の頃はなんとか過ごしていました。しかし中学年になると、友達との間でトラブルが起きようになりました。先生からトラブルの報告を受けている時「育て方が悪い」と責められているように感じてしまうこともありました。また次第に、A君はトラブルになった時、タイムスリップして、今回の出来事と過去の出来事を一緒にして話すようになりました。まわりには、それが「うそつき」「話を作る」というふうに映りません。パニックを起こしたA君を迎えに行き、保健室で一人しょんぼりしている様子を見ることは、親としてもつらいものがありました。

【共通理解に動き出す】 周囲の人に理解してもらうためにA君の特性を明らかにしようと決めたのは、小学4年生の時でした。受診後、保護者は医師や心理士に支えられながら、担任の先生にA君の特性と対応の仕方を伝えました。さらに、保護者会でも話しました。また通級指導を受け始めることについて、学級には担任の先生から話してもらいました。周囲の理解が進むにつれ、A君が保健室に行くことは減り、教室で過ごせるようになりました。



【中学校】 **再び教室に入れない** 直接的原因は友達とのトラブルでしたが、教科担任制などの新しい環境なども間接的原因として関係していると保護者は感じていました。授業中、A君を廊下で見かけた先生方は、それぞれに声かけをしてくれました。A君の話によると、A君を受け持っていない先生でしたが、理科の準備室に呼び入れ、顕微鏡で何か簡単なものを見せてくれたりもしたそうです。先生方のちょっとした声かけ・対応で、A君は気持ちを切り替えて教室に戻ることができました。

【授業での支援】 (サッカーは好きだけれど)運動が苦手なA君は、体育の時間はどのように参加していたのか。跳び箱の授業では、跳び箱のところに走っていただけ。でも先生は、跳ぶことを強要せずに見守ってくれていました。水泳の授業では、泳げないけれど浮くことが出来たときには、先生はそれをほめてくれていました。先生方はそれぞれの授業で、A君のできている点やがんばりを認める声かけをしていたことが分かりました。



【行事への参加】 スキー合宿は半年も先なのに、毎朝A君は「スキー合宿には行きたくない」と担任の先生に言うようになったことがありました。担任の先生と保護者が連絡を取り合い、保護者は先生に「さとさずに、軽く応じて欲しい」とお願いしました。先生は、半年間いやな顔ひとつせず「そうか」と応じ続けました。半年間のこのやりとりを通して、自分なりに折り合いがつけられたからか、A君は結局、スキー合宿に参加することができました。

【部活動での支援】 サッカー部の部員の保護者にA君の特性を話し、後ろから支えてもらいました。3年生の保護者は、家庭で「3年生なんだから、1年生を見るのは当然よ」と話してくれました。先輩たちは、自転車による試合遠征で、自転車移動で遅れがちになるA君を見守りながら走ってくれていました。

< 小学校の担任の先生（4年時と6年時の2年間）から >

保護者の話の中で、何度も名前があがった先生がいました。それは、保護者が受診を決心した時の担任の先生です。A君の特性が十分に分からなかった時期、担任の先生もつらかったのではないだろうかと思いながら、当時のことをうかがいました。



学級に対して パニックを起こしやすいA君に、そして他の子どもたちに、どのように対応するとよいだろうかと悩みました。そして「A君にとってクラスは安心できる場ではないだろうが、お互いのよい面から学び合えるクラスを作っていくことは、教師の自分にできるのではないか」という考えに至り、「子どもと子どもをつなげよう」「子どもたち同士の関係を悪くさせないでおこう」と心がけました。例えば、トラブルになりA君が過去の出来事の話をしている時、先生は「過去のその出来事は、A君にとって大きなことだったんだ」と感じました。そして相手の子に「その出来事は、A君にとってはとてもいやなことだったらしいよ」と伝えたりしました。また、A君がことばでうまく表現できず、行動で表現してしまった時には、学級に対して「みんなも家でお母さんからガーンと言われて言い返せない時があるよね」などと話していくと、みんなA君の気持ちを分ってくれました。

A君に対して 先生は、A君は話を聞いてもらうと落ち着く傾向がある事に気づきました。トラブルがあった日、先生は休み時間や放課後、A君の気持ちを聞いていました。しかし「気持ちが混乱している今、人に気持ちを少し聞いてもらうことで、気持ちを立て直せるならば」と思い、他の先生方の理解・協力を得て、A君に「保健室に行ってきていいよ」と言うようになりました。

ぽけっと

A君の発達を支えた支援



A君の着実で穏やかな発達は、A君が本来持っていた力と、まわりの人たちの支援によるものだと感じました。そして、以下2種類の支援が行われていたことに気づきました。

障害特性に対応した支援

トラブルがあったとき過去の出来事を一緒に話すことがありました。そのような時、先生は「その出来事は、A君にとってはとてもいやなことだったらしいよ」と、A君の認知特性をまわりの子どもが理解し納得しやすい形で示す支援を行っていました。また毎朝「スキー合宿に行きたくない」と言いに来るA君に対し、「また言いに来たのか」等と言わずに「そうか」と応じる先生の対応は、A君の特性に応じた形で気持ちを受け止める支援であったとともに、A君の気持ちが落ち着かない時の支援の仕方をみんなにさりげなく示す支援だったと思いました。

一般性のある支援

A君を支える大人たちは、学級作り、学年指導、「3年生だから1年生を見るのは当然」と先輩としての役割を自覚させることなどを通して、障害の有無にかかわらず、子ども同士のサポートのネットワークを作っていました。また、保護者は担任以外の先生や保護者からA君の様子を聞いたりすると、「みんながAを見ていてくれる」という安心感が持て元気づけられたそうです。A君を支える大人たちのネットワークは、保護者をサポートするものとしても機能していたと思いました。

また、中学校の先生方の声かけの一つ一つは点のような小さな支援でした。しかし、子どもの特性や支援が共通理解されていることで、小さな支援はつながり合って面のような安定した支援になることも、A君の成長過程を通して学ぶことが出来ました。（文責： 心理士 太田真紀）

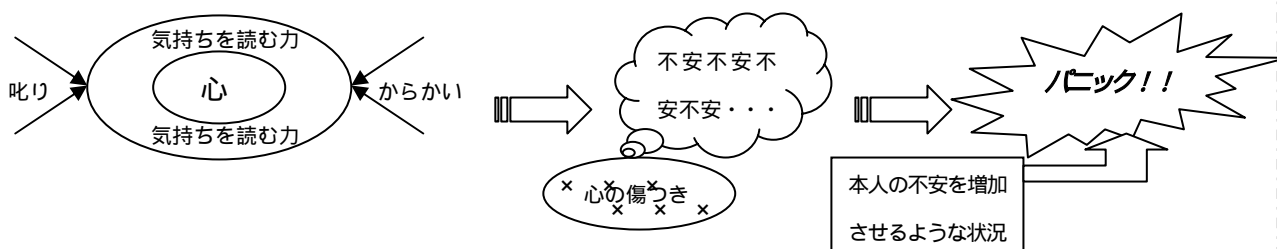
『二次障害とパニック』

二次障害の本体

二次障害は発達障害等を抱える子どもが、周囲からその特徴を理解されないことで、その心に傷を負った結果生じるものです。皆と同じことができなかつたり、突然周囲からみておかしい行動、言動をとってしまうときに、ひどく叱られたり、馬鹿にされたりといったことが繰り返されて心に傷を負います。この心の傷つきが二次障害の背後にはあると考えられます。心の傷つきが深くなると、被害意識の増大や自尊心の著しい低下などを引き起こします。そこから自分を守るために状況に合う合わないに関わらず他者への敵意を示したり、出来る出来ないにかかわらず学習に大きな抵抗を示したりといった状態を示します。

なぜパニックは起きる？

上に述べた、子どもが自分を守るために身につけた方法に対して理解が得られず、叱られたり馬鹿にされたりが続くことで、傷つきが大きくなり不安が増大し、それを抱えきれなくなってパニックが起こるものと思われます。叱られたり、馬鹿にされたりしている理由（相手の気持ちや意図）が理解できれば、そのことで生じる嫌な感情を抱え、傷つきを抑えることができますが、その理由を理解する力が弱いとそれができにくいいため、パニックが起こりやすいのです（図参照）。



どうしたら・・・？

まずはその子がなぜパニックになってしまうのか（先天的な知的能力や生育環境による心理的状态等）を理解することが不可欠です。その理解が進むと、支援する人の中に「そっか～！それはパニックになってもしかたない！」「腑に落ちた！」という思いが生まれるのではないかと思います。するとパニックになっても（自傷他害がない場合）支援する側が落ち着いて対処することが可能となります。そして集団から離れたうえで何が不安だったのか、どんな気持ちになったのかを知り、さらに理解を深め、どうなると良かったのか、今度パニックになりそうになったらどうするか（例えば決められた場所へ移動する、手を挙げて先生に伝える、取り組んでいる課題を中断する等）などを本人と考えていくと良いと思います。このようにパニックを止めるのではなく、可能な限りパニックを許容し、それがなくなるにはどうしたら良いかをともに考えることが大切なのだと思います。

（文責：心理士 頼母木直人）

巡回相談のご案内

心理士・研究主事などが、授業観察、聞き取り、ときには発達検査などを通して発達の特性を見立て、先生方と一緒に校内での支援について考えていきます。

まずは電話でご相談ください。相談の進め方をご案内いたします。

電話予約 情報共有 日程調整 巡回訪問（状況により継続相談）

教育センター特別支援教育担当： 664-1615（直通）

